開経偈

無上甚深微妙の法は、
百千万劫にも遭い奉ること難し。
我れ今見聞し受持することを得たり。
願くは如来の第一義を解せん。

至極の大乗思議すべからず。
見聞触知皆菩提に近づく。
能詮は報身、所詮は法身、
色相の文字は即ち是れ応身なり。
無量の功徳皆この経に集まれり。
是故に自在に、冥に薫じ密に益す。
有智無智罪を滅し善を生ず。
若は信、若は謗、共に仏道を成ぜん。
三世の諸仏甚深の妙典なり。
生々世々、値遇し頂戴せん。

お経を読誦する心がまえ

すぐれている仏法〔仏陀の教え＝法華経〕には、百千万劫という想像もできないほどのあいだにも触れ合うことが難しい。
ところが、私は今、そのような仏法に出会い、この法を信じ、唱えることができた。
ねがわくは、仏陀が最後に示される〈無上の教え＝法華経〉を理解したい。
仏法の極まりである大いなる〈教え＝法華経〉は、凡人には容易に理解することができないものである。
しかし、見ること・聞くこと・感ずること・知ることのすべてを通して、仏陀の無上の〈お悟り〉に近づいてゆくことができる。
大乗の教えを明らかになさるのは久遠の救いをお示しになる仏陀釈迦牟尼世尊であり、そして、かたちに表わされた法華経の文字の一字一字は、仏陀が衆生を救うために現わされた〈お姿〉なのである。
このように、はかり知れない功徳が、皆この法華経に集約されている。
それだから、私たちの知らないうちに、法華経の功徳が私たちの身に染まり、ひそかに利益を与える。
そして、智慧ある者も無智の者も、ともに罪を滅ぼし、善を生ずるのである。
また信じる者はもちろん、誹謗する者も〔それが逆縁となって〕共に仏道を完成するに至るのである。
この法華経は、過去・現在・未来の三世のもろもろの仏陀の、はなはだ深い悟りが示されている、すぐれた経典なのである。幾度生れ変わろうとも、〔このありがたい法華経に〕会いたてまつり、おしいただいて信奉しよう。

1999/05/28　　written by IKKOH

欲令衆

諸仏世尊はー衆生をーしーてー仏知見をー開かーしーめー、
清浄なることをー得せしーめんとー欲するがー故にー、世にー出現したもー。
衆生にー仏知見をー示さんとー欲するがー故にー、世にー出現したもー。
衆生をーしーてー仏知見をー悟らーしーめんとー欲するがー故にー、
世にー出現したもー。
衆生をーしーてー仏知見のー道にー入らしーめんとー欲するがー故にー、
世にー出現したもー。
舎利弗、是れをー諸仏はー唯一大事のー因縁をー以てーのー故にー、
世にー出現したもーとなづく。

三界はー安きーこと無しー。猶火宅のー如しー。
衆苦充満しーてー甚だー怖畏すべしー。常にー生老病死のー憂患あーりー。
是のー如きらのー火、熾然とーしーてー息まず。
如来はー已に三界のー火宅をー離れーてー、

方便品第二

寂然とーしーてー閑居しー、林野にー安処せーりー。
今比のー三界はー、皆是れー我がー有なりー。
其の中のー衆生はー、悉くー是れー吾がー子なりー。
而もー今此の処はー、諸のー患難多しー。
唯我れー一人のーみー、能く救護をー為すー。

譬喩品第三

我れー化のー四衆、比丘比丘尼、及びー清信士女をー遣してー、
法師をー供養せしめー、諸のー衆生をー引導しーてー、
之をー集めーてー法をー聴かしーめん。
若し人悪力杖、及びー瓦石をー加えんとー欲せーばー、
則ちー変化のー人をー遣してー、之がー為にー衛護とー作さん。

法師品第十

爾の時にー宝塔のー中よーりー大音声をー出しーてー、歎めてー言わくー。
善哉善哉、釈迦牟尼世尊、能くー平等大慧・教菩薩法・仏所護念のー
妙法華経をー以てー大衆のー為にー説きたーもー。
是のー如しー、是のー如しー。釈迦牟尼世尊所説のー如きーはー皆是れー真実なーりー。

見宝塔品第十一

1999/05/28　　written by IKKOH

自我偈（訓読）「妙法蓮華経如来寿量品第十六」

我がー此の土はー安穏にしーてー　天人常にー充満せーりー
園林諸のー堂閣　種種の寶をー以てー荘厳しー　寶樹花果多くーしーてー
衆生のー遊楽する所なーりー　諸天天鼓を撃てー　常にー諸のー伎楽をー作すー
曼陀羅華をー雨しーてー　佛及びー大衆にー散ずー
我がー浄土はー毀れーざるにー　而も衆はー焼けつきてー　憂怖諸の苦悩
是のー如くー悉くー充満せりとー見るー
是のー諸のー罪のー衆生はー　悪業のー因縁をー以てー　阿僧祇劫をー
過ぐれどーもー　三寶のー名をー聞かずー　諸のーあらゆーるー功徳をー修しー
柔和質直なるものはー　即ちー皆我身ここにーあってー　法をー説くとー見るー
或る時はー此の衆のー為にー佛壽無量なりとー説くー　久くーあってー乃しー
佛をー見たてーまつるー者にーはー　為にー佛にはー値い難しーとー説くー
我がー智力かくのー如しー　慧光照すーこーとー無量にー壽命無数劫

久くー業をー修して得る所なーりー　汝等智あらん者　此にー於てー
疑を生ずるこーとー勿れー當に断じーてー永くー尽きしむべーしー
佛語はー実にーしーてー虚からずー医の善きー方便を以てー
狂子をー治せんがー為の故にー実にーはー在れどーもー
而もー死すとー言うにー能くー虚妄をー説くもーのー無きがーごとくー
我も亦こーれー世のー父　諸のー苦患をー救うー者なーりー
凡夫の顛倒せるをー以てー　実にーはー在れどーもー而もー滅すーとー言うー
常にー我をー見るをー以てーのー故にー　而もー僑恣のー心をー生じー
放逸にーしーてー五欲にー著しー　悪道のー中にー堕ちなん
我れー常にー衆生のー道をー行じー　道をー行ぜーざるをー知てー
度すべーきー所に随てー　為にー種種のー法をー説くー
毎にー自らーこの念をー作すー　何をー以てーかー衆生をーしーてー
無上道にー入りー　速にー佛身をー成就することをー得せしーめんとー

1999/05/28　　written by IKKOH

妙法尼御前御返事

夫れ以みれば日蓮幼少の時より
仏法を学び候しが念願すらく、
人の寿命は無常也。
出づる気は入る気を待つ事なし。
風の前の露、尚譬にあらず。
かしこきも、はかなきも、
老いたるも、若きも
定め無き習ひ也。
されば先、臨終の事を習ふて
後に他事を習ふべし。

解説
西暦一二七八年、
七月一四日に身延より発信
静岡県岡宮に住す妙法尼が
夫の臨終の有様を身延の日蓮聖人に
報せてきたことに対する返書

妙法尼御前御返事（現代語訳）

そもそも、考えてみるのに、
日蓮は随分若い時より仏法を学んだが、
人の命は無常であって
吐く息は吸う息を待つこともなく、
風に吹かれる露の滴よりもはかない。
利口な人も、馬鹿な人も、
年老いた人も、若い人にも、
必ず死は訪れる。
それ故、他の事は後回しにしても、
何よりも先に臨終のことを習うべきだと、
常々心に思っている。

1999/05/28　　written by IKKOH